第二部

支部協会の歩み

※北海道

歴代会長
初　代 錦戸善一郎（昭和28年～）
第２代 中山信一郎（昭和42年～）
第３代 石林　　清（昭和45年～）
第４代 松岡　靖雄（昭和49年～）
第５代 工藤万砂美（昭和62年～）
会長代行 八田　信之（平成２年～）
第６代 八田　信之（平成４年～）

事務局　〒011　北海道札幌市中央区中島公園1-5　北海道体育協会内
稲岡　眞雄　TEL0144-32-5321

〈沿 革〉

協会設立に至る経緯

昭和29年第９回国民体育大会の北海道開催が決定し、ウエイトリフティング競技の会場は、札幌公会堂（現札幌市民会館）に予定された。札幌市教育委員会の要請により、札幌市体育連盟が主体となり、ウエイトリフティング競技の開催主管団体の設立準備に入った。

当時、札幌市体育連盟の理事長であった横江一郎と、学生時代に選手経験のあった小助川克頭などが中心になって、協会の設立に当たったのであった。

当時日本協会の理事長であった井口幸男氏（日本協会参与）、事務局の野口岩三郎氏（故人）からの協会設立に関する規約の制定、組織づくり、指導者や選手の育成強化等、諸般にわたる指導・助言のもとに昭和28年６月19日、北海道ウエイトリフティング協会が誕生したのである。初代会長は錦戸善一郎、理事長には横江一郎の体制であった。すぐに日本協会に加盟するとともに北海道体育協会にも加盟し、今日に至っている。

この年、協会設立の僅か５カ月目であったが、第８回四国国体に選手４名を派遣した。初出場であったが、ＬＨ級の城岡正美が７位入賞し幸先のよいスタートを切った。翌年の第９回国体北海道大会は、当初札幌公会堂開催予定が変更になり、小樽市花園小学校に変更された。

〈年次別概況〉

昭和27年
札幌協会創立。

昭和28年
北海道協会設立（６月19日）初代会長錦戸善一郎。第８回国体四国大会に初参加。監督小仲敏男、Ｂ級小助川克頭（札幌）、Fe級木村英俊（札幌）、Ｌ級木村広也（札幌）、ＬＨ級城岡正美（札幌）、福島県よりＢ級南部・Ｆ級白鳥選手がデモンストレーション（於小樽市）。

昭和29年
本道初の全国大会である第９回国体北海道大会の開催主管にあたる。総合第３位となる（於小樽市）。監督後藤重治、Ｆ級佐藤雄（札幌）、Ｂ級小助川克頭（札幌）、Fe級山谷晃（小樽）、Ｌ級木村広也（札幌）、Ｍ級梶浦博（小樽）。

昭和32年
第３回全国高等学校選手権大会を札幌市円山小学校体育館で開催主管した。札幌北高校生が準備の中心になって、国体に次ぐ全国大会の開催。

昭和34年
北海道・明大対抗競技会を開催（於札幌市）。当別協会創立。第19回全日本選手権大会で沖野昭蔵Ｆ級で本道初の第３位入賞。

昭和36年
第１回全道高校選手権大会開催（協会主催・札幌市体育館）。大会規模は、三笠高校、美唄工業高校、札幌光星高校、北海道工業高校、札幌工業高校、札幌第一高校の７校合計９名。

昭和37年
第９回全国高校選手権大会において、Ｂ級八田信之（札幌光星高校）が本道の高校生としてはじめて、第３位に入賞。釧路協会創立・夕張協会設立。

昭和38年
全日本学生選手権でＦ級八田信之（中央大）が５位入賞。

昭和39年
第18回国体でＦ級八田信之（中央大）が５位入賞。

昭和40年
イランで開催の世界選手権大会で八田信之（中央大）Ｌ級で初出場、７位に入賞。

昭和41年
東ドイツで開催の世界選手権大会でＬ級八田信之が５位に入賞。

昭和42年
全日本選手権でＬ級八田信之が優勝。第22回国体も優勝。本道選手初の快挙。

昭和43年
第19回メキシコ・オリンピックにて八田信之Ｌ級で４位に入賞。この年第19回全日本選手権大会Ｌ級優勝。
士別協会創立。第１回全道高校新人戦大会開催。

昭和44年
旭川協会設立。
第１回北海道実業団・社会人大会を開催。

昭和45年
第６回アジア大会（於タイ国）にて八田信之がＭ級で優勝。

昭和46年
５月30日、第６回日韓親善ウエイトリフティング大会（於札幌市）の開催主管にあたる。第27回国体で八田信之がＭ級で優勝。

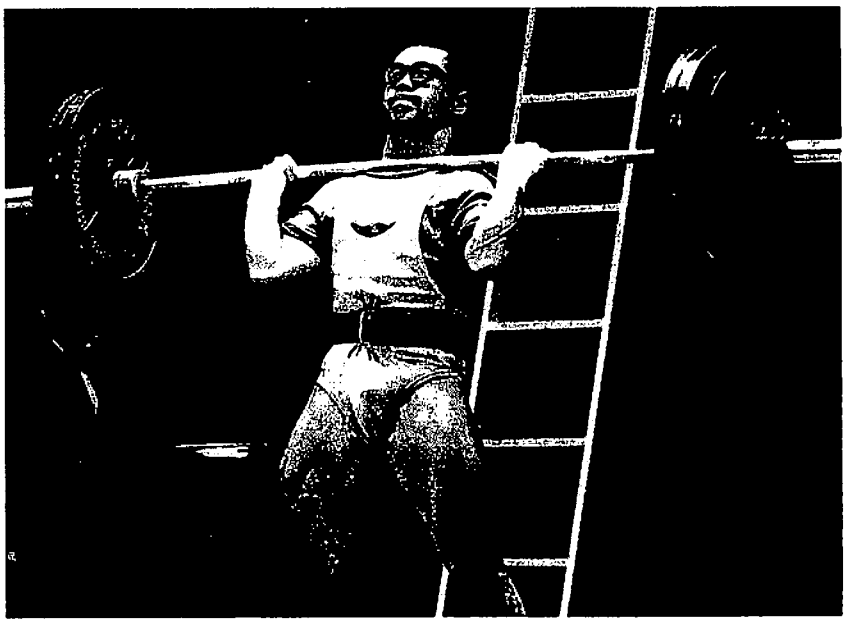
昭和47年
北海道高等学校体育連盟にウエイトリフティング競技専門部が設立。
昭和42年頃から夕張の藤田秀紀を中心に普及活動がはじまり、夕張工業高校に正式な部（朝井省三顧問）が誕生。その後、釧路第１高校（大和田耕三顧問）・当別高校（藤原秋雄顧問）・石山高校（堤顧問）・琴似工業高校（石沢俊郎顧問）・東海第４高校などが次々に部に昇格し、念願の道高体連加盟を遂げた。

昭和48年
第１回全道高校選手権大会を開催（高体連専門部主催・於札幌石山高校）。国体道予選会を静内町で開催。
室蘭協会創立。

昭和52年
釧路第１高校廃校。第１回全道学生選手権大会開催（於札幌）。

昭和53年
北海道協会創立25周年記念式典開催。
創立25周年記念大会。第１回東北・北海道社会人大会開催（於札幌）。北海道・警視庁対抗戦（於札幌）。

昭和54年
当別協会創立20周年記念誌発行。
夕張市で、全国に先駆けて中学生の本



八田信之のメキシコ五輪の雄姿

格的な指導をはじめる。(藤田道場)
82.5kg級稲岡脈雄(中央大)・100kg級山本司(中央大)インカレを制す。

昭和56年

夕張協会15周年記念大会開催。
第6回日中友好ウエイトリフティング競技大会主管にあたる。(6/19札幌市、6/21士別市)
第1回道北大会並びに第1回全道ジュニア大会開催。(12月於旭川市)

昭和57年

第44回国体を目指し中学生の本格的な強化を始める。夕張・士別・当別などの中学生は順調に育ち、各種大会で旋風を巻き起こす。後に日本中学記録として公認される(選手強化委員長一野呂記代志、強化委員一藤田秀紀・加納修・福島明雄・安野健治)。北海道・アルバータ州親善スポーツ交流として8人の選手・役員をカナダに派遣。

昭和58年

北海道・アルバータ州親善スポーツ交流ウエイトリフティング競技大会の開催主管にあたる。(札幌・士別・夕張)

昭和59年

第39回全国高校選手権大会において、56kg級牧田広明(夕張工業高校)が本道の高校生として初優勝。夕張で長年指導を続ける藤田秀紀と、教え子でもある夕張工業高校教諭野呂記代志のコンビが全国制覇の快挙をなし遂げた。団体でも夕張工業高校は5位に入賞する。
牧田は、第39回国体でも優勝し2冠を達成し、総合成績でも少年の活躍で第22回大会以来の7位に入賞。稲岡脈雄(北海道電力)が全日本選手権大会82.5kg級で第3位入賞。

昭和60年

第40回全国高校選手権大会において、90kg級岡田純一(士別高校)が大会タイ記録で優勝(父は士別協会会長岡田晃)。前年の牧田の優勝の刺激を受けて若い加納修を中心とする士別の指導陣が意地を見せて全国初制覇。団体でも士別高校が8位入賞。第40回国体では、少年の活躍67.5kg級鈴木盛之(夕張工業)3位、75kg級佐野剛(夕張工業)2位、90kg級岡田3位で、総合成績で59年に引き続き、7位に入賞。(他県に先駆けて行った中学生の選手強化が結実してきた。また、この頃から「はまなす国体」に向け、(財)北海道体育協会の強化予算が増え、道内・道外合宿及び埼玉県・兵庫県・栃木県などの優秀指導者を招聘し、指導を受ける)

昭和61年

本間税(士別高校)が第1回全国高校選抜大会75kg級で準優勝。第39回全国高校選手権大会では、82.5kg級に出場し、本道選手の3年連続優勝かと思われたが、上原(沖縄県)の逆転Jで惜しくも準優勝。60kg級牧田広明(中京大)インカレを制す。

昭和62年

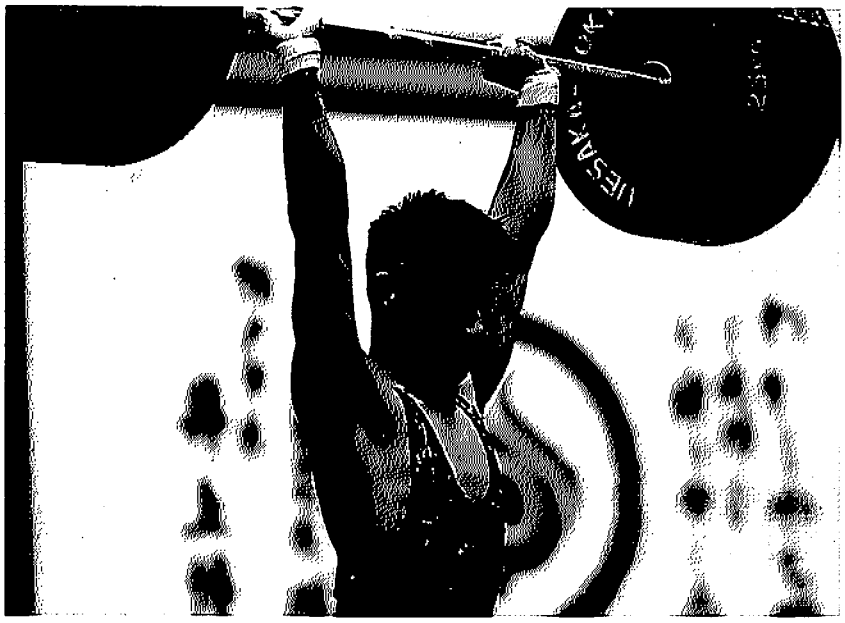
全国から選手・役員820名を迎え、全国高校総合体育大会・高松宮賜旗第34回全国高等学校総合体育大会ウエイトリフティング競技選手権大会の開催主管にあたる。(於士別市)
全国大会3年連続開催の第一弾として、緊張と不安のなかの開催であったが、スムーズな大会運営で好評を得、国体開催への自信を深める大会となった。大会期間中は、異例の寒さで南国の選手は減量などに苦しんだようである。
また、本道の選手の活躍が期待されたが、向井龍治(当別高校)の4位(父は当別協会理事長向井敏雄)が最高成績で、地元開催のプレッシャーに負け「はまなす国体」への不安を残す。

昭和63年

内閣総理大臣杯第25回全日本社会人選手権大会兼第16回全日本実業団選手権兼第6回全日本マスターズ選手権大会を「はまなす国体リハーサル大会」として開催主管する。併せて「はまなす国体女子大会」を開催(於士別市)。
ソウル五輪日本選手団最終合宿(於士別市)。夏合宿の開催場所として北海道に多くの大学・実業団を受け入れる。(ナショナルジュニア・ナショナル女子・中央大・日体大・明大・山形県・自衛隊体育学校など多数)

平成元年

第44回国体秋季大会の開催主管にあたる(於士別市)。
昭和56年から開催準備にあたった、「はまなす国体」は、開催地士別市(国井英吉市長・玉田次夫国体事務局長・片岡哲男事務局次長)の絶大な努力と日本協会の適切な指導のもとスムーズな大会運営で成功裡に終了できたのである。
また、地元体育協会(会長今井忠則)や市民団体の多数の協力は特別に記しておきたい。他県の選手・役員のみなさんにも大変な好評を得た大会であった。
また、10年の歳月をかけて選手強化の結果、輸入選手なしの純潔の本道選手で戦い、昭和29年の第9回国体以来の総合成績第3位の快挙をなし遂げたのである。参加選手全員が入賞し、成年67.5kg級林和明(札幌光星高校教諭)がT優勝。56kg級牧田広明(北海道体育協会)・90kg級岡田純一(早稲田大)が3位。高松隆美(当別協会)が8位。少年も56kg級橘典人(士別高校)がJ優勝・T2位、52kg級五島英一(夕張工業高校)が2位、75kg級山口博(士別商業高校)が5位の成績で少年の部総合優勝を兵庫県と分ける。地元選手を輩出するということは、会場が大いに盛り上がるものだ。
この国体の成功には、顧問である額賀医師の多大な貢献があったことを付しておきたい。
またこの年は、女子選手の活躍も目覚ましく44kg級坂上由起子(士別高校)が一瞬ではあるが、Sで日本記録を樹立し2位。67.5kg級向井初美(当別協会)



八田信之に続くスーパースター橘典人、五輪出場の目標に向かってハードな練習が続く。

も２位に入賞。

平成２年

この年は、「はまなす国体」の選手強化の継承もあり、順調に競技成績をあげる。橘が60kg級に階級を上げて、選抜・国体優勝。90kg級加川健太郎（士別高校）は、選抜・総体２位、国体優勝。100kg級加藤秀樹（夕張工業高校）が、選抜優勝。国体では、少年の部で念願の総合優勝を果たす。成年も林が２年連続Ｔ優勝で活躍。

平成３年

６月全国女子選手権大会・全日本マスターズ大会を開催主管する（参加選手105人・於士別市）。女子は75kg級向井が２位。マスターズ大会には、往年の名選手たちが気を吐き、深味正三（日鋼室蘭）・岡田晃（岡田商店）・藤原秋雄（当別高校教諭）が優勝。保原利治郎（片桐商会）・遠山善美（士別営林署）が２位。今野澄男（三井生命）・中田正剛（札幌アスレチッククラブ）・前川正喜（王子製紙苫小牧）が３位の成績をおさめる。この大会以後道内のマスターズ選手は、地道な努力で全国・道内の試合で大活躍し、若手に対して大いなる刺激を与えている。

特筆されるのは、平成４年にオーストラリアで開催された第10回世界マスターズ世界選手権で、59kg級の遠山善美（士別営林署）が優勝、同時にＳで90kgを挙げ世界新記録をマークする。

この年も少年選手が活躍、75kg級白井和人（士別商業高校）が選抜・全国高校総体優勝、82.5kg級木村芳広（士別商業高校）が選抜・全国高校総体・国体２位。全国高校総体団体では、士別商業高校がこの年５位入賞。

平成４年

82.5kg級木村芳広（士別商業高校）が、選抜大会で全種目大会新記録で優勝。全国高校総体・国体も90kg級で完全優勝し、本道初の全国三冠を果たす。

この年も高校生が大活躍し、国体では、90kg級木村と60kg級渡辺裕斗（夕張緑ヶ丘実業高校）が優勝、67.5kg級黒田泰行（稲北高校）が３位に入賞する。本道２度目の少年の部優勝を果たす。

成年は、日大進学後、成長目覚ましい橘典人（日大）が全日本ジュニア選手権大会60kg級で約20年ぶりでＪ153kg・Ｔ272.5kgの大学記録を樹立して優勝、最優秀選手に選ばれ、この年行なわれるバルセロナ五輪の代表選手として浮上した。世界ジュニア選手権で265kgを挙げれば代表獲得ができたが失格。オリンピック代表の夢は、アトランタまで引き延ばされた。

平成５年

協会40周年記念大会・式典を盛大に開催。三木功司選手強化委員長の講演会。北海道朝鮮初中高級学校の金太壌（父は現在の武田副会長）が、全国でも上位の記録を樹立。朝鮮初中高級学校の全国高校総体出場の運動が、北海道から全国に広がる。

苫小牧協会設立。平成２年から稲北高校の指導にあたる福島明雄の長年の夢を、黒田泰行（稲北高校）が高校選抜大会で、新階級70kg級で制し現実のものとした。同級で堀川寛（士別高校）が３位入賞を果たす。

続く全国高校総体では、64kg級黒田、原田栄次（当別高校）が２位（父原田敏文は当別協会理事。叔父は愛工大名電高校監督高橋力氏）、国体では64kg級黒田が優勝、70kg級堀川が３位と活躍。成年は橘が、オリンピック代表にもれたうっぷんを晴らすべく国体で、Ｊ優勝を果たす。

協会創立40周年記念事業として、米国・カナダ遠征に八田会長はじめ26名が、両国の親善交流をはたした。

韓国ナショナルチームが士別市で合宿。

平成６年

白井英和（士別商業高校）全国高校総体・国体ともに70kg級２位入賞。士別商業高校全国高校総体団体８位入賞。

国体では、橘がＪで日本新記録を樹立してＴ初優勝。

韓国合宿開催。八田団長以下20名がソウル五輪選手村で、韓国ナショナルチームと合同練習。

平成７年

平成３年に優勝した兄和人に続き、白井英和が選抜大会70kg級で優勝する。（父は士別協会理事長白井清隆）続く全国高校総体では、70kg級白井が２位、54kg級楠本哲宏（士別商業高校）が３位。士別商業高校が全国高校総体団体８位に連続入賞。

国体では、士別東高校に赴任になった橘がＪ・Ｔ大会新記録で優勝し国体Ｊ３連覇、Ｔ２連覇し世界選手権の出場権を獲得する。白井も意地をみせ、全国高校総体の雪辱を果たし、Ｔで優勝する。

11月中国で開催された世界選手権に橘が64kg級で出場する。昭和40年に出場した八田会長以来、実に30年ぶりの快挙である。結果は、12位と入賞には届かなかったが、アトランタ五輪の出場に大きく近づいた。アマチュアの最高峰の五輪出場に本人と協会関係者の夢が広がる。

今後の目標と課題

北海道協会も平成10年には、45周年を迎える。多くの関係者の熱意と情熱に支えられ、全国大会の開催や国際交流、選手の育成や青少年の健全育成に寄与してきたものである。

やはり、本道のウエイトリフティング競技の普及は、２回の道内開催の国体を契機に成し遂げられたといえる。

１回目の、昭和29年の第４回国体では、競技そのものを道民に理解してもらうという、いわばスポーツとして認知してもらう仕事であった。

その暗中模索の手さぐりのなかから八田信之というスター選手を産み、本人

が道民の一人として五輪に出場したことにより、競技の普及が一気になされたのである。しかし残念ながらその後の競技成績の方は、決して芳しくなく低迷の時代が続いたと言ってよいだろう。

しかし、2回目の第44回国体の開催に当っては、体制の整った協会が選手強化を大前提として取り組んだ。指導者スタッフはみな20代の若者で、経験も実績もなく、ただただ一生懸命指導した。その結果全国優勝者をだすまでに成長し、はまなす国体は大成功だった。その後も順調に、そして確実に実績は上がる。

しかし、課題も多く長年指導をいただいた各高校の顧問の先生が退職期を迎え、地方協会の役員も高齢化の現状は否定できない現実である。

なんといっても、協会は選手あっての協会で、次代を担う若手の指導者の育成が急務である。また、中学生の選手が皆無になり、全体の選手層は次第に薄くなっているおり、決して楽観できる現状にはないようだ。現実を的確に把握し、今後の対策を講じる必要に迫られているものである。

最後に日本ウエイトリフティング協会の60周年を心よりお祝いし、日本協会並びに全国の各協会の益々の発展を祈念して筆を置くことにする。

〈現役員〉

会長	八田 信之		
副会長	沖野 昭蔵	岡田 晃	
	向井 敏雄	中田 正剛	
	芝山 一雄	藤田 秀紀	
	近藤 鎌吉	今野 澄男	
	武田 光泰	前川 正喜	
理事長	稲岡 眠雄		
副理事長	合田 博	片岡 哲男	
常任理事	藤原 秋雄	白井 清隆	
	赤松 幸一	深味 正三	
	野呂記代志	松本 正	
	若木 逸幸	加納 修	
理事	朝井 省三	若松 市政	
	遠山 晉美	原田 敏文	
	荒井 正	渡辺富士彦	
	只野 建吉	大原 匡久	
	山田 守	下村 敏美	
	河崎 紀男	藤田 明博	
	大山 公知	福島 明雄	
	中村 博昭	安野 健治	
	渡辺 光弘	林 和明	
	板東 逸雄	高橋 亘光	
	金丸登志夫	鈴木 盛之	
	三上 正洋	川畑 貫裕	
名誉会長	工藤万砂美		
名誉顧問	横江 一郎	額賀 磬示	
顧問	小助川克顕	佐々木昭次	
	葛 健二	中野 貞夫	
	湯浅 俊一	内山 武	
	三浦 金次	西田 進	
	真田 清臣		

青森県

事務局　〒037　青森県五所川原市広田字藤浦83-17　五所川原工業高等学校内
永田　忠勝　TEL0173-35-3444

歴代会長

初　代 斎藤　　馨（昭和31年～）
第２代 島口重次郎（昭和33年～）
第３代 佐々木金蔵（昭和34年～）
第４代 金沢　安次（昭和39年～）
第５代 佐々木啓二（昭和46年～）
第６代 濟藤　六郎（昭和49年～）

〈沿 革〉

協会創立以前

本県におけるウエイトリフティングのルーツも、他県と同様若者達の「力石持ち比べ」や、「俵かつぎ」と思われる。昭和52年の「あすなろ国体」時、会場の前に重さの異なる20個程の石を展示したが、これも平賀町に残されたものであり、各集落毎にあったものということであった。娯楽とて少なかった昔の若者達にとっては、格好のスポーツであり、イベントのひとつであったことは容易に想像がつく。

こうした時代背景があり、競技としてではなく、ボディビル的要素を取り入れたバーベルトレーニングが、昭和20年代の後半から本県でも普及しはじめた。もちろん今日のような立派な器具のない時代であったから、各々が工夫し鉄の丸棒にブロックを取りつけたり、トロッコの車軸をそのまま使ったということであった。その広がり具合も、八戸市を中心としたグループと、津軽を中心としたグループがほぼ同時期に始めており、全県的な広がりといってもよい。後年、これらの人たちが競技者として育っていくことになる。

さて、競技として最初に取り組んだのは、対馬範男であった。彼は高校時代身長が高いこともあってバレーボールをやっていたが、大学(中央大学)に進学するとボディビルに熱中した。ウエイトリフティングを始めるきっかけとなったのは、川崎市で開催された国体を見学したことであった。緊張感みなぎる一瞬の競技、すっかり魅力に取りつかれ、同好の士を募って本格的に競技者としての活動を始めることになった。大学公認のクラブでなかったので用具一切、合宿費用はもちろん遠征も自弁であった。

しかし、バーベルを手にしてから１ヶ月後の「全日本学生選手権大会」に出場したら６位となった。昭和30年秋のことである。青森県初のリフター誕生となった。

以後彼の行動力と熱意により、部員数が130名という大学一の大所帯にまで成長し、公認の部として大学に認められるまでになった。

協会創立に至る経緯

対馬はこれを青森県に普及するため郷里弘前に帰って来た。実家の近くにある弘前中央高校石川分校に成田陸雄先生を訪ねた。

競技の特性は冬期間の長い本県に向いており、将来きっと本県を代表するスポーツ種目になり得ると熱心に説得したのである。彼の熱意に、成田は分校でクラブとして実施することを約束した。昭和31年春、こうして石川分校に本県初のウエイトリフティング部が誕生したのである。

数学の教師であった成田は猛勉強を始めた。ルールはもちろん、全国の様子など、先進県である秋田県から知識や資料の提供を受け、悪戦苦闘の指導が始まった。

当時、福島県や宮城県は全国のトップレベルにあり、秋田県も昭和36年の国体に向けて、すでに強化体制をとっていた。

一方、対馬は県全体への普及を考え、昭和31年９月１日青森市で開催された第11回県民体育大会の総合開会式で、大学の仲間と模範演技をしてアピールした。当時の地元紙(東奥日報)も「満場の喝さいを浴びた」と報じている。彼はまた、国体参加を考えていたので、その足で県の保健体育課長室を訪ね、本県での普及を訴えるとともに、バーベルの購入をも約束させるという行動の早さをみせ、体育協会加盟まで済ませてしまうという離れ技をしたのである。ここに青森県ウエイトリフティング協会が発足した。

対馬にリードされて発足した協会は、初代会長には石川分校主任の斎藤馨が、理事長には成田陸雄が就任して組織が出来た。

〈年次別概況〉

昭和31年度

９月１日、青森県重量挙協会発足。
第11回国民体育大会に参加、本県初の公式大会参加となる。

昭和32年度

東奥義塾高に愛好会が誕生。
他に興味を示す人たちが現われ、一般の若者たちの間にも普及しはじめる。
11月24日、第１回県選手権大会を開催した。この大会で、石川分校の小田桐清三がM級Ｐで、未公認ながら日本高校新記録を挙げた。

昭和33年度

秋田県との交流大会を５月４日、観桜会で賑う弘前市で開催した。
結果は秋田県の圧勝であったが、本県にとって大いに勉強になった大会であった。
９月、第３回東北選手権大会を弘前市で開催した。福島県の強さだけが目立ったが、本県勢も二人が２位に入賞するなど、着実に力をつけてきた。
中央大学が夏休みを利用し、弘前公園で強化合宿を実施、津軽地方の競技力向上に大きな役割を果たした。
一方、八戸市においても、JWAの遠藤、五月女氏を講師に実技とルールの講習会を開催し、全県的規模で急速に普及がなされることになった。

昭和34年度

県民体育大会の正式種目として採用される。競技人口の少ない本競技が取り入れられたことは、普及・発展という意味でも極めて大きい出来事であった。
昨年に引き続き、秋田県との交流大会を実施したが、当初の目的を達したということで、２回をもって終了することになった。

昭和35年度

弘前市協会が発足し、５月１日、観桜会で賑う弘前公園に面した小学校で、

第１回県選手権弘前大会を開催した。地方から集まって来る若者への宣伝を念頭に入れたことはいうまでもない。
この年から、国体高校の部はブロック予選制となり、以後10年、国体出場を目標に高校の強化に力を注ぐことになる。
第５回東北大会でFe級の斎藤鉄弥(東義高)がＳで92.5kgを挙げ、日本高校新記録を樹立した。

昭和36年度

弘前市に続いて、八戸市協会が発足し、県南大会を開催することになった。津軽地方の各種大会が途中で消える中、この大会は現在も続いている。

昭和37年度

昭和32年から続いていた県選手権大会を発展的に解消し、「狼の森大会」を開催する。
狼の森というのは、弘前市の郊外にある地名で、対馬範男の後輩で斎藤鉄弥の生まれ育った所である。農家の長男ということで大学進学をあきらめた斎藤は、二人の弟と共に競技生活を続け、私費を投じて大会を開催したのである。
昭和30年代後半から40年代の初めにかけ、三人の影響力は強く、特に高校生の育成に力を注いだ。
なお、全日本社会人大会において、斎藤三兄弟を中心とした「斎藤農園」チームは、全国制覇を果たしている。

昭和38年度

高体連ウエイトリフティング部が発足する。
高校選手権大会、新人大会を開催する。初代委員長の小森長徳(尾上高教頭)は、「人の馬力大会」なるポスターを自ら作成し、新人大会を津軽地方では最も有名な狼賀神社の秋の大祭と同じ日、同じ場所、しかも土俵の上で開催するといったユニークな考えの持ち主であった。
小森のやり方といい、弘前大会のやり方といい、人が大勢集まる所で開催したのである。本競技の普及を第一に考えてのことであった。

昭和39年度

東京オリンピックが開催され、三宅義信氏の活躍は、本県においてもその影響力は大きく、競技人口も大幅に増えた。
第４回を数えた弘前大会は所期の目的を達して終了し、八戸大会へ引き継がれることになった。現在の春季選手権大会である。
また、津軽地方で行われていた県何々大会も、それぞれの目的を達し、終了することになった。
第９回東北選手権大会を弘前市で開催し、一般の部のFe、ＬＨ、Ｈの３階級で優勝、総合でも初の優勝となった。

昭和40年度

来年度開催の第14回全国高校総合体育大会に向けて、役員養成、強化合宿等多忙な一年となった。

昭和41年度

黒石市において第14回全国高校選手権大会を開催した。
大会は大成功のうちに終了、中でもＦ級今村選手の記録は日本高校記録として、長く破られることがなかった。
本県選手団もよく健闘したが、９位が最高の記録で入賞はなく、残念の一言に尽きる。
この年は、県ウエイト界を支えてきた理事長成田陸雄、委員長小森長徳の両氏が相ついで逝去という不幸な年でもあった。

昭和42年度

あと一年全国高校総体開催が遅かったら、と思うほど今年の高校生はすばらしい成績であった。７名が出場し、５名が入賞したのである。学校対抗の部でも八戸工業高校が７位入賞を果たした。
余勢を駆って国体予選に臨んだが、Ｆ級の失格で万事休した。

昭和43年度

昨年に続き八戸工業高校が全国高校総体で５位入賞を果たすなど、高校生のレベルは全国区に達した、といってよい。
しかし、国体予選ではまたもＦ級の出遅れ(５位)で万事休した。同点で、上位入賞者数で涙を飲んだのである。

昭和44年度

予選制が設けられ、10年目にしてようやく高校の部が国体出場権を獲得した。エース今定博を中心に、重量級が充実した本県チームは、運もツキも味方に接戦を制したのであった。
今定博は、階級は異るが全国高校総体、国体ともに勝ち、本県初の全国覇者となった。

昭和45年度

８年間続いた「狼の森」大会は、その目的を十分果たし幕を降した。
現在活躍中の指導者の多くは、この大会に一度は出場し、斎藤の指導を受けたのである。
八戸工業高校は、県高校総体において、昭和42年の第５回大会から４年連続優勝という偉業を成し遂げた。この記録は34回を終えた今日もなお破られていない。

昭和46年度

昭和52年の国体開催内定を受け、本県ではいち早く選手強化体制を整えた。
その一環として、三宅義信氏を講師に迎え、指導者の研修も兼ねた選手強化合宿を実施した。
経験と理論に裏づけられた三宅氏の指導は、選手はもちろん指導陣にとっても初めての経験でもあり、目標以上の成果を得ることができた。
９月、仙台で開催された、国体ブロック予選会において、高校チームは２位で予選通過と思われたが、選手登録日が一日遅かったという理由で幻の国体出場となった。中央紙でも大きく報じられ、話題になったものである。名誉のために５名の選手を記録に留めたい。

Ｆ　級　成田勝義(五所川原工高)
Ｂ　級　出貝和義(八戸商高)
Fe 級　福田忠次(木造高)
Ｌ　級　三浦公夫(木造高)
ＬＨ級　永田忠勝(五所川原工高)

昭和47年度

昨年の汚名を晴らすように、５名の高校生はブロック予選を僅差の２位で通過し、本番では５位に入賞した。この結果、一般は振わなかったものの、高校の得点だけで総合７位と、本県初の天皇杯得点を獲得した。
五所川原工業高校の永田忠勝は、全国高校総体、国体ともにＬＨ級のチャンピオンとなった。本県２人目の快挙である。

昭和48年度

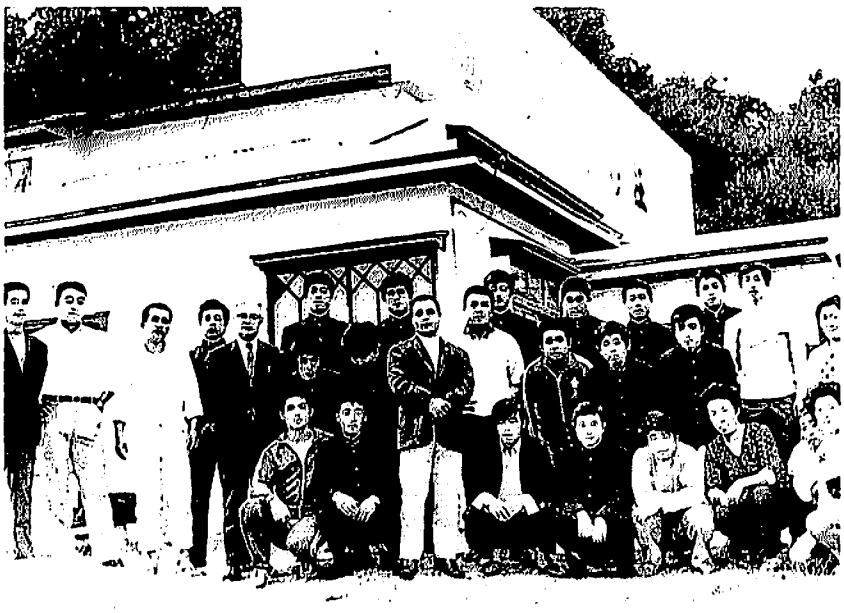
52年「あすなろ国体」へ向け、役員養成講習会や高校１年生を中心とした強化体制の確立など、一段と動きが活発となる。従って、競技成績は今一歩という感じのする一年であった。

昭和49年度

国体のリハーサル大会を兼ね、第34回全日本選手権大会を平賀町で開催した。トップリフターの来県でいやがうえにも国体開催への関心が高まった。
本県選手団はＢ級田中、Ｍ級今、ＬＨ級長内、Ｈ級木村の４名が入賞し、一般選手の充実ぶりを地元の人びとにアピールした。

昭和50年度

田中憲雅(金木高、拓殖大学出身)が、本県初の世界選手権大会出場者となった。
田中の影響で大学進学者も増え、特に拓殖大学は本県出身者の活躍で好成績



三宅義信氏と強化合宿参加者(平賀町)

をあげるようになった。
高校生の国体に向けた強化も軌道に乗り、3年後の成果が期待されるところ大となった。

昭和51年度

来年に迫った国体に向けた強化は極めて順調に消化され、全国高校総体では5名の入賞者を出した。
神奈川で開催された国際コーチクリニックに森理事長が参加し、大いに研鑽を積んできた。
同じく森理事長は、6月、ポーランドで開催されたジュニア世界選手権大会にコーチの1人として参加し、ヨーロッパの強さを改めて感じとってきた。

昭和52年度

8月、広島県高梁市で開催された全国高校総体において、金木高校が堂々の団体優勝を成し遂げた。もちろん青森県初の快挙である。
個人戦の部でも強さを発揮、10人中2人が優勝、合せて9人が入賞するといった大活躍ぶりであった。
10月、待望の「あすなろ国体」の開幕となった。本県チームは全国高校総体での大活躍で大いに期待したが、総合3位止まり、悲願の優勝は成らなかった。とはいえ、少年・成年とも強豪の仲間入りを果たし、十分満足の行く結果であった。

昭和53年度

木村明義が日中友好大会に出場した。
船越謙(柏木農高)が全国高校総体82.5kg級で優勝した。
競技力がアップし、東北では敵なしという感じの一年であった。

昭和54年度

5月、平賀町で日中友好大会を開催した。国体での実績が評価され、青森県で開催されたのである。本県からも67.5kg級に岩田誠、75kg級に成田幸成、82.5kg級に船越謙、100kg級に木村明義の4名が出場したが、結果は中国側の圧勝であった。
6月、ハンガリーで行われたジュニア世界選手権大会に、森理事長はコーチとして2度目の参加をした。
東北総合体育大会で本県チームは52年から3連勝を果たし、東北のリーダー県としての立場を確立した。

昭和55年度

5月、成田幸成(五所川原工業高校出、日本大学)は、カナダでのジュニア世界選手権大会に出場した。(262.5kgで第9位)
柏木農業高校が全国高校総体で団体準優勝となり、個人戦でも56kg級の藤田章が優勝した。藤田は秋の国体でも優勝し、第2回日韓ユース大会に出場した。
今定博(柏木農高教員)が、ジャカルタでのアジアコーチクリニックに参加した。

昭和56年度

東北高校選手権大会がスタートし、金木高校が2位、柏木農高が3位と健闘した。
東北総合体育大会でも総合優勝を果たし、東北ではトップを維持。

昭和57年度

佐々木正強(五所川原工高)が全国高校総体100kg級で優勝。
古川幹人(金木高)も国体60kg級で優勝した。
日本体育大学に進学した藤田章は着実に力をつけ、日中学生大会に出場するなど高校生の目標となった。

昭和58年度

西沢勝美(柏木農高)は、全国高校総体、国体の60kg級で優勝し、第5回日韓ユース大会に出場した。
藤田章はカイロのジュニア世界選手権大会に出場し、257.5kgを挙げ9位となった。
ここ数年、海外遠征する選手が増え、リフターの目標も大きくなってきた。本県からもオリンピック選手を、との期待も膨むばかりである。

昭和59年度

藤田章や西沢勝美といった大学生の活躍が目につく一方、高校生のレベルの低下が心配されるようになってきた。
実際、全国高校総体では入賞者が2名、国体でも3名の入賞だけという寂しさである。
日本体育大学に進学した西沢勝美は、第2回アジアジュニア大会に出場した。

昭和60年度

4月、八戸市において東北ブロックの審判講習会を開催した。
西沢勝美は、ジュニア世界選手権大会に続き、アジアジュニア選手権大会にも出場した。

昭和61年度

第6回東北高校選手権大会で柏木農業高校が初優勝を果たした。
西沢勝美が2年連続でジュニア世界選手権大会出場を果たすとともに、パンノニア国際大会にも出場した。
全国高校総体において、久しぶりに4名の入賞者を出し、高校選抜大会では奈良輝揚仁(柏木農高)が100kg級で優勝した。

昭和62年度

全日本中学生大会が始まり、44kg級に出場した野上豊(内潟中)が優勝した。
奈良輝揚仁が日韓ユース大会に出場、110kg級で275kgを挙げ第1位となった。
東北高校選手権大会で柏木農高が2連勝を果した。

昭和63年度

東北高校選手権大会で五所川原工業高校が優勝し、本県は3連勝ということになった。
また、東北総合体育大会でも実に7年ぶりに総合優勝し、青森県の健在をアピールした。
しかし、全国高校総体では、辛うじて1名が入賞しただけであった。

昭和52年、全国高校総体で堂々の総合優勝を果たした金木高校選手団

国体では、得点の方法が変ったことにより、思っていた以上の得点をあげることができた。

平成元年度

大学2年生になった奈良輝揚仁は、全日本ジュニア選手権大会110kg級で292.5kgで優勝した。

西沢勝美は大学を卒業し自衛隊体育学校に入り、一段とグレードアップし、世界の檜舞台へと飛躍するようになる。

平賀東中学校にクラブが誕生する。

国体ではそれなりに得点を稼ぐものの、全国高校総体では入賞者なしと、近年にない不調の一年であった。

平成2年度

古川優(五所川原工高)が全国高校総体56kg級で優勝した。7年ぶりの快挙となった。

米田誠(八戸工大一高)が高校選抜大会100kg級で優勝、来年度の一層の活躍が約束された。

平成3年度

大学4年生になった奈良輝揚仁は、第37回全日本学生個人選手権大会+110kg級J競技で200.5kgを挙げ、日本新記録を樹立した。

奈良の後輩で八戸工大一高から日本大学に進学した馬渡清隆は、第21回全日本東西対抗選手権大会110kg級Jの特別試技で183.5kgを挙げ、ジュニア日本新記録を樹立した。奈良といい馬渡といい、本県が生んだ若きヒーローとなった。

第23回アジア選手権大会に森理事長がレフリーとして参加した。

平成4年度

特筆すべきことはただひとつ、第52回全日本選手権大会で、馬渡清隆が+110kg級で優勝を成し遂げたのである。第49回67.5kg級で優勝した西沢勝美に次いで、本県2人目の全日本チャンピオンの誕生となった。

この年から平成6年まで3年にわたり全国高校総体での入賞がゼロと、高校生にとっては冬の時代に入った。

平成5年度

第15回日韓ユース大会に、森理事長が総監督として参加した。

国体ではそれなりに得点はするものの、東北レベルの大会でも成績は不満の残る結果となった。

平成6年度

第14回東北高校選手権大会を平賀町で開催するも、成績は今一歩であった。

第12回アジア競技大会に森副会長がレフリーとして参加した。

競技力は相変らず低調から脱せず、根本的対応策の検討がなされた。

平成7年度

低調からは相変らず脱し切れていないが、4年ぶりに全国高校総体で入賞を果たすことができた。

しかし、新人大会では久しぶりに大型新人が現われ、明るい見通しに指導陣も安堵しているところである。

とはいえ、関東地区との差が大きくなりつつある今日、「あすなろ国体」前後の強化体制を再評価し、強い青森県の再建を目指し大いに努力する必要性を感じる今日此頃である。

〈現役員〉

会長	清藤	六郎	
副会長	中村	彬男	森 功
	奈良	稔	
理事長	長内	久志	
副理事長	工藤	孝憲	今 定博
常任理事	唐牛	哲夫	大西 三男
	細越	清春	秋山 正雄
	久保田	寛	
理事	木村	清蔵	
	大沢	春彦	小野 勇市
	福田	忠	藤田正次郎
	木村	明義	大川 欽三
	野呂	洋	花田真一郎
	柴田	利正	藤田 章
	松尾	晴彦	小泉 三一
	成田	幸成	会津 秀悦
	山内	秀幸	山内 芳宏
監事	平葭	和敏	村上 弘二
事務局長	永田	忠勝	

岩手県

事務局　〒023-11　岩手県岩谷堂字根岸116　岩見堂農林高等学校内
千葉　幹一　TEL01973-5-2018

歴代会長
初　代 吉田　光一　（昭和27年～）
第２代 藤原仁左エ門（昭和33年～）
第３代 赤坂　俊夫　（昭和43年～）

〈沿 革〉

協会創立に至る経緯

〈昭和11年〉

日本重量挙げ競技連盟発足。本県への導入は定かではないが、昭和14年の神宮大会に本県選手が出場した記録がある。

重量級に出場した東磐井郡清水村の千葉武（東洋精機）が３位に入賞している。しかし、本県で知る人は少ない。

〈昭和22年初秋〉

盛岡市大通りに駐留していた米軍情報部ロバート・ローア軍曹が当時の県体育協会長・小泉多三郎のところへ使いを出し、「市の体育担当者を至急駐留本部へ派遣するように」と連絡してきた。

たった一人の市役所体育係、田村光政（後に県選手強化本部委員・常任理事、盛岡市議）が何事かと出向いた。

ローアは、かたことの日本語で「非公式のバーベルがあります。スポーツの奨励と国際親善に役立つから重量挙げをやりなさい」と競技の普及を進めた。

田村は、重量挙げについての知識は全くなく、県北地方で行われている俵差しあげとか、平泉の弁慶力餅あげと似たようなものだろうぐらいに考えていた。

ローアは、自分の部屋の床の間にバーベルをピカピカに光らせ飾っていた。田村の求めに応じ何度も「こうやるのだ」と手本を示し、時には市役所まで出かけて職員の前で実演して見せた。田村は都合４回程通って手ほどきを受けた。しかし、用具一式の値段が１万8000円と聞いて尻込みをしたという。

〈昭和23年〉

盛岡市の松屋デパートの薄暗い地下室で実技講習会が行われ、岩手の重量挙げが産声をあげた。参加者は市職員や米軍関係者と若者８人であった。

講習会が行われた日の午後、県公会堂で国体Fe級優勝者中島虎男選手（長野県）の模範演技が開かれ、この演技が岩手県で行われた初の公式演技であった。これといって娯楽のなかった当時、未知への興味も手伝って会場は満員の盛況だったという。「メシも十分食わえでそんな事したって…」という声もごく当然のように聞かれた時代ではあったが、バーベルと重量挙げという競技の持つ魅力にひかれ、進駐軍の広場や市役所前の空き地などを利用した青空練習であった。

昭和23年、佐藤勝夫（初代理事長）が地下室に集まった仲間らと、盛岡市内で同好会のグループを結成して定期的な練習を始めた。当然バーベルなどは不足しており、鉄棒の両端にコンクリートを固めたり、トロッコの車輪を利用した練習であった。

〈昭和26年〉

地下室で産声を挙げた岩手の重量挙げは、数少ない関係者や選手の熱意が高まり、競技普及のためにも組織の必要性が認識され、「岩手県重量挙げ協会」を誕生させた。

会長には吉田光一を選出し、協会としての体制が整い、東北では宮城県に続いて本格的な競技活動のスタートをした。

〈年次別概況〉

昭和27年

第１回盛岡市民体育大会開催。この大会ルールは、用意したバーベルの重さが48.7kgであったため重さを競うのではなく、挙上回数で順位を決めた。さらに、期間は１月７日から22日の間に、午前９時から午後４時までの時間内であれば、何回でも挑戦できるというものであった。

優勝記録は32回、相撲の関佐虎（国鉄盛岡工場）。会場は盛岡市役所玄関前であった。

第７回国体に参加。盛岡市民体育大会で４位であった佐藤勝夫がM級３位に入賞。

昭和28年

第５回岩手県民体育大会から大会要項に認められ正式種目として開催。

昭和29年

第６回県民体育大会で６階級に熱戦。

昭和30年

第７回県民体育大会に20数名参加。
競技普及の兆しが見えた。

昭和31年

第８回県民体育大会で４階級に県新記録。記録的にも向上する。

昭和32年

協会名を岩手県ウエイトリフティング協会に改称する。

第12回国体、M級　佐藤勝夫　８位

昭和33年

第13回国体、M級　佐藤勝夫　８位（２年連続）

昭和34年

盛岡市民体育大会に、正式種目として開催。

昭和35年

盛岡市ウエイトリフティング協会創設。各郡市で協会設立の動きあり。

昭和36年

県協会役員改選。
　会　長　藤原仁左エ門
　理事長　佐藤　勝夫

第16回国体、Fe級　木村茂松　８位

昭和37年

第14回県民体育大会から高校の部が加わる。

昭和38年

第15回県民体育大会は、初めて盛岡市を離れ、江刺市役所４階ホールで開催した。

岩手国体誘致に備え、江刺市協会設立準備会発足。

昭和39年

第24回全日本選手権大会兼東京オリンピック代表選手最終予選会を江刺市で開催。（岩農林高校体育館）

M級　松崎早何士　６位

武徳殿

第１回県選手権大会を開催した。(盛岡市武徳殿・岩手公園内)

昭和40年

第10回東北選手権大会を盛岡市で開催。

第２回全日本社会人選手権大会

　Fe級　松浦英美　２位

県高体連に専門部加盟。

岩農林高・岩高・盛一高・盛三高・専大北上高・水沢高

昭和41年

第18回高校総合体育大会に正式種目となり、大会を江刺市で開催。

第25回全日本選手権大会

　Fe級　松浦英美　２位

第21回国体

　Fe級　松浦英美　６位

国体に向け県協会主催の強化合宿を県トレーニングセンターで実施。

昭和42年

江刺市ウエイトリフティング協会設立。

第27回全日本社会人選手権大会を江刺市で開催。

国体開催県へ視察団を派遣。

岩手国体に向け着実に力をつけてきた選手側と協会側とが何らかの意見の対立から、県体優勝者(国体選手最終選考)が国体選手から外されるという問題に発展し、地元新聞に大きく取り上げられる。

昭和43年

県協会役員改選。

　会　　長　赤坂俊夫

　理 事 長　村井信行

　事務局長　古舘　光

佐々木哲英加入。戦力増強。(Ｆ級ジュニア世界記録保持者)。

第28回全日本選手権大会を江刺市で開催。

第１回県記録会を開催。(武徳殿)

好記録続出。国体に期待をつなぐ。

国体開催に向け審判講習会開催。

国体開催県へ視察団を派遣。

高体連専門部に対し学校対抗戦優勝トロフィーを寄贈。

全国高校総体に初めて参加。

島田晴行(岩農)・阿部武則(岩農)

鷹嘴文昭(盛三)

昭和45年

〈岩手国体江刺市で開催〉

成年の部　佐々木哲英　優勝

少年の部　出場選手全員入賞。

少年

Ｆ級	相模正利	３位	257.5
Ｂ級	高橋光雄	４位	250.0
Fe級	菊池則行	５位	277.5
Ｌ級	吉田栄一	６位	305.0
ＬＨ級	栃内祐治	５位	305.0

成年

Ｂ級	佐々木哲英	１位	347.5
ＭＨ級	松崎早何士	８位	377.5

全国高校総体

　Ｌ級　吉田栄一　７位

昭和46年

全国高校総体で初の上位入賞者出現。

　Fe級　菊池則行　４位

昭和47年

第27回国体、Ｂ級　鷹嘴文昭　７位

昭和48年

第28回国体、Ｂ級　鷹嘴文昭　７位

(２年連続)

全国高校総体

　Ｌ級　菅野建也　７位

昭和49年

競技経験者の保健体育教諭２名が高校に配置。本格的な競技指導。

千葉幹一(日体大)岩農林高校

鷹嘴文昭(岩手大)雫石高校

全国高校総体初のメダル入賞者出現。

　Ｆ級　紺野博美　７位(団体４位)

　Fe級　高橋豊志　２位

(体重差で優勝を逃す)

　学校対抗戦総合５位。11点

第１回東北総合体育大会を江刺市で開催。(岩谷堂農林高校)

昭和50年

全国高校総体初の優勝者出現。

Ｆ級　細川　学校対抗８位

ＬＨ級　福崎君夫　優勝

学校対抗戦総合６位。10点

昭和49年・50年と２年続いた全国高校総体上位入賞は、東北勢としては最高位の成績をあげた。全国はもとより東北の関係者らに「これからの岩手はすごいぞ」といわしめた。

第30回国体

　少年　ＬＨ級　福崎君夫　２位

岩手日報体育賞受賞

福崎君夫(雫石高校)

昭和51年

全国高校総体

　Ｍ級　小田島　４位

昭和52年

第32回国体

　少年　75kg級　菊池　有　６位

昭和53年

第33回国体

　成年　110kg級　福崎君夫　２位

昭和54年

第34回国体

　少年　82.5kg級　佐藤秀悦　８位

　成年　110kg級　福崎君夫　２位

昭和55年

第35回国体

　少年　67.5kg級　高橋　学　８位

　成年　＋110kg級　福崎君夫　優勝

第７回東北総合体育大会を雫石町で開催。(雫石高校)

昭和56年

第36回国体

　成年　＋110kg級　福崎君夫　優勝

(２連勝)

昭和57年

第37回国体

　少年　67.5kg級　紺野幸輝　６位

　成年　＋110kg級　福崎君夫　優勝

(３連勝)

全国高校総体

　少年　67.5kg級　紺野幸輝　６位

昭和58年

佐々木選手の表彰写真

第38回国体
少年　52kg級　菅野重克　3位
成年　＋110kg級　福崎君夫　優勝（4連勝）
全国高校総体
52kg級　菅原重克　2位
昭和59年
第39回国体
成年　＋110kg級　福崎君夫　優勝（5連勝）
全国高校総体
67.5kg級　次嘉昭博　7位
第4回東北高等学校選手権大会を江刺市で開催。
昭和60年
第40回国体
少年　52kg級　高橋克彦　6位
75kg級　及川清博　8位
成年　＋110kg級　福崎君夫　優勝（6連勝）
全国高校総体
56kg級　今井達浩　8位
昭和61年
第41回国体
少年　52kg級　高橋克彦　2位
56kg級　菅野寛一　6位
全国高校総体優勝者現る。
52kg級　高橋克彦　2位
第13回東北総合体育大会を雫石町で開催。（雫石高校）
昭和62年
第42回国体
成年　＋110kg級　福崎君夫　2位
県高総体学校対抗戦に優勝旗を寄贈する。
平成元年
第41回県民体育大会を花泉町で開催。
平成2年
第10回東北高校選手権大会を江刺市で開催。（岩谷堂農林高校）
平成3年
第46回国体
成年　52kg級　高橋克彦
S5位　J6位　T5位
平成4年
第47回国体
成年　52kg級　高橋克彦
S2位　J7位　T4位
第19回東北総合体育大会を江刺市で開催。（江刺市体育文化会館）
平成5年
第45回県民体育大会を野田村で開催。
（野田村体育館）
平成6年
第13回マスターズ大会
83kg級　工藤秀人　2位
全国中学選手権大会
76kg級　千葉基樹（一関中）2位
平成7年
第13回マスターズ大会
83kg級　工藤秀人　2位（2年連続）
第50回国体
少年　52kg級　山田　忍　S8位
平成11年度岩手全国高校総体開催決定。（江刺市）

〈平成11年度岩手全国高校総体開催決定〉

全国規模の大会開催規模・運営が立派になってきております。現在の県協会・高体連専門部等の力量では全国大会の開催・運営については困難さが予想される。

大会開催が本県ウエイトリフティング競技の普及及び競技力向上に大きなエネルギーを与えてくれることを確信し、山積する諸問題を一歩一歩解決していく決意であります。

日本ウエイトリフティング協会並びに関係各位の力強いご指導を賜りますようお願い申し上げます。

〈現役員〉

会　長　赤坂　俊夫
副会長　篠村　五平　高橋　孝
古館　盛助　佐藤　力男
佐々木守功
理事長　角掛　宣夫
理　事　蜂谷　憲一　佐々木哲英
及川　勝　鳴田　健一
後藤　節夫　木村　英彦
高橋　芳昭　鷹觜　文昭
千葉　幹一　栃内　祐治
山内　貞光　高橋　幸一
工藤　秀人
事務局長　千葉　幹一